小原国芳、荘司雅子監修「フレーベル全集」を読む

津守　真

これは日本ではじめてのフレーベル全集の完訳である。記念すべき出版である。

とくに、荘司雅子氏が生涯をフレーベル研究に捧げられ、この全集完訳の大業をなしとげられたことに、心からの敬意を払うものである。

私は第四巻と第五巻を読んだが、この大型の書物を手にとっただけでも、何か大きな力に圧倒される。第四巻と第五巻の前半は、フレーベルの「幼稚園教育学」の翻訳である。私は「幼稚園教育学」を読んだのはこれがはじめてである。

訳者あとがきに、荘司雅子氏が自ら記されているところによると、この訳稿は、昭和十三年に広島文理科大学教育学科を卒業された後数年間に、故長田新先生の指導の下に初めて全訳されたものである。その後、この原稿は、四十年以上も筆者の書斎に眠ってきたということを知るに及んで、心の底に感動を覚えた。一、八〇〇枚の原稿であるという。

この「幼稚園教育学」を読んで、私はフレーベルがいまここで

語りかけているような気がして、フレーベルという人をあらためて見直した思いである。第一章　回顧と展望――新年にあたっての瞑想――の冒頭は、「人間は、古い年の終りと新しい年の初めにあたって、すでに目はやってくる年に向かっていながら、あらたに消え去ろうとしている自己の生涯の一部、すなわちいまや終ろうとしている年をかえりみずにはいられないものである」という文章からはじまる。そして教育が人間にあたえたものと拒否したものとについて、自分自身の内部に問うて後、あのフレーベルの有名な句「さあ、わたしたちの子どもらに生きようではないか」が、突然（のように私には思われた）があらわれる。

すでに標語のようにすらなっているこの句が、どうしてここにあらわれるのか、あらためてその前後の思索と共に何度も読み直し、私はいろいろと考えさせられた。フレーベルが云うように、自分の過去に光をあててみるとき、「自分がなしたことやゆるがせにしたこと、得たものや失ったもの……自分に協力し自分を助けたことがらや、自分を妨害し自分のじゃまをしたことがらなど」が心に浮んでくる。フレーベルもこの時期までに、自分がたずさわった学園のことで、喜びのみならず、いくつも苦い思いをしている。それらの考察の結果、彼は教育は単なる事業ではなく、人間の本質に根ざした行為であることを認識し、その本質を自分にも子どもにも実現するところに学園の意義を見出している。そして過去の挫折にもかかわらず、新らしい年への希望を見出し、力にみたされる。そこまで考え至るのは、彼にとっても容易ではなかったに違いない。そしてその次に、胸の奥から、「さあ、わたしたちの子どもらに生きようではないか！」という呼びかけが出てくる。

これは単に戸外に出て子どもらと遊ぼうということだけではない。すぐ次に「子どもでなかったどんな人間もいない」と云うように、子どもは、自己の内にある子どもでもあり、人間の本質でもあり、そして現実の子どもでもある。ここにはわれわれ自身のよりよい自己に生きるという課題がふくまれている。子どもによって、お互いの人間の本質がよびさまされるところに、教育の仕事の独自性がある。そこで、過去を顧み、将来を望み見る境目に人が立たされるとき、「さあ、わたしたちの子どもらに生きようではないか」というこの呼びかけは、「真実の生命の叫び」であるというフレーベルの言はよく理解できる。

フレーベルの書物をよむとき、私はそのあまりにも真摯な態度に圧倒されることがしばしばある。しかし、教育を、普通の事業や、普通の組織体と同じようにしか考えず、管理経営や経済の面からしか見ない人々の多い現代に身をおいて苦労している幼児教

育関係者には、フレーベルのこのことばは大きな力になる。

私の観点からの主観的な読み方で、当を得ていない点もあるかもしれないが、フレーベルの人間が赤裸々に出ているこの「幼稚園教育学」は、理論上の批判をこえて、幼児教育者の力となりつづけることはたしかである。このような完訳を得たことは、消えることのない味方を得た思いである。

第二章は、創造的な活動衝動をはぐくむ学園の計画という主題で、彼の幼児教育の学園の具体的な目的や計画がのべられる。彼の深遠な哲学は、学園の建設という具体的な事業にむけられていることがここではっきりとわかる。このことは、第五巻に収められている第二十三章から第三十章に、さらに明瞭に示されてくる。第二十三章、一八四〇年六月二十八日――ブランケンブルクとカイルハウの幼児と青少年のための学園における四重の祝祭日という章では、学園の子どもたちの誕生日の祝い、グーテンベルク祭、聖ヨハネ祭りと一緒に、この日にドイツ・キンダーガルテンの創立祝いが行われた具体的な一日の記録が詳しくのせられている。早朝に山の上に行列を作って登ってゆく。七歳の少年から十七、八歳の最年長の生徒まで二列をつくって、列のうしろには教師が、そして小さい娘たちや大きい娘たちがつづく。山頂につくとフレーベルの声がきこえる。太陽が雲層からあらわれ、（「幼稚園創立はまず最初に妨げとなる雲と戦わなければならない」）全員で四部合唱の讃歌がうたわれ、フレーベルの挨拶がある。そして皆で朝食をとり、十時から礼拝がなされる。午後からブランケンブルクへと移動する。途中、車の台板がこわれるという突発事故などの報告もさしはさまれて、町のホールで行われたグーテンベルク祭と学園創立記念祭の報告がこまかに描かれる。読んでいると、自分がこれに参加しているような気がしてくる。グーテンベルク祭につづいてフレーベルの演説がある。その中でキンダーガルテンの設立を宣言し、署名による出資申込みを訴える。そのあとベートーベンのフィデリオからのアリアが歌われ、子どもたちが輪をつくって遊戯をする。そして夕方になって一同でささやかな食事をとって解散する。朝からの長い一日、どんなにか疲れただろうなどと思ってしまうほどその報告はくわしい。第二十四章には一八四〇年の幼稚園創設計画書、一八四三年の弁明書、第二十五章には教育組合の結成のための呼びかけ、付、このような教育組合の定款の一例、として規定の条項までのせられている。

私が、フレーベルの「幼稚園教育学」について、はじめてきいたのは、終戦直後に東大で学んでいたとき、唯一の幼児教育の授業であった岡部弥太郎先生のゼミでのことだったと思う。たしか、フレーベルの幼稚園の具体的なことはよくわかっていないが、「幼稚園教育学」という書物を見るとわかるだろう。ただし訳は出ていないというはなしであった。私はこれを読んでみたいと思い、神田の古本屋を探して歩いたが見つかるはずもなく、その代りに、「人間教育」の原書の一九一三年チンメルマン編のものを見付けて帰ってきた。それはいまもだいじにしている。けれども、そのドイツ語があまりに難解で、それは読まないままに本棚に並べてある原書のひとつである。そのフレーベルの著書の完訳をなしとげられた、地味な学者の努力に、敬意を表せずにはいられない。考えてみると三十数年前に岡部弥太郎先生のゼミで、「幼稚園教育学」の書物のことをきいたとき、すでに荘司雅子氏の書斎には、その訳が完了してあったのである。

つい、部分的な感想に紙数をつかってしまったが、こうして前後関係を照し合わせながら、フレーベルの文章を考えることをさせてくれるのは、正確でよみ易い完訳のおかげである。この全集の完成のおかげで、フレーベル研究が進むのみでなく、日本の幼児教育の土台石が一つ置かれた感がする。

フレーベル生誕二百年の最大の記念塔である。

＊

フレーベル全集邦訳全五巻

第一巻　教育の弁明

第二巻　人の教育

第三巻　教育論文集

第四巻　幼稚園教育学

第五巻　続幼稚園教育学

母の歌と愛撫の歌

玉川大学出版部